

「春秋日記」③（明治 32 年）

タイトル	「春秋日記」③（明治 32 年）
著者名	能海寛
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第 17 号
ページ	45－47
発行年	2012.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。 石峰と号す。明治元年 5 月 18 日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）淨蓮寺に生まれる。12 歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあつては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦前伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の 34 年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

明治32年 「春秋日記」

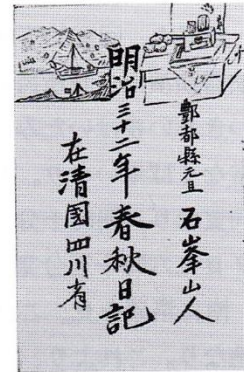
鄭都県元旦 石峰山人 在清国四川省

元旦

ゆ免のよを 多どるたびじの ゆめとても よきゆめむすべ ゆ免のなかにも

前途

月と日と もともと我身 東より ことしのくれは 西におちつけ
月も日も 我身も西に 入りてこそ 東のそらに またのぼるなれ



明治32年1月1日 本年の前途は如何、歳暮何処にある哉。午前七時半晨起、沐浴。八時半勤行。小經正信偈。念五、読三。九時、皮万十二個、砂糖附。以て餅に代用、食事終り。前記三首を詠す。

本朝前三時陸上に数人ヤアヤア ラルラル ヤアヤア ヤアヤア

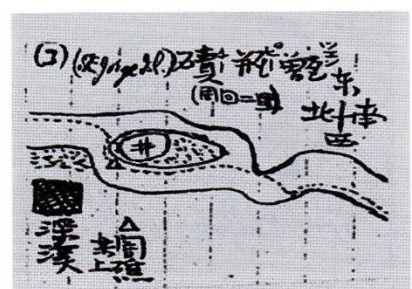
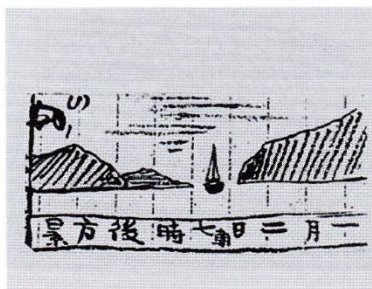
ラルラルヤアヤア、の念經の如き声を聞き目さむ。遥かに郷国の最早や元旦の時なるを想い、又目を閉づ。夢みん所、甚多く、又至ありて混雜し、前途のことあり、過去のことあり、近況のことあり。但し、皆善夢たりしなり。朝、菓子を売りに來たる舟老あり。三十文にて五個油砂糖より成るものを求めたり。晴天也。西藏文典を讀習す。大に得る所あり。蜜柑十個。モーユイ（こんにやく）三、四個求む。本日は元旦のことなれば休日す。但し、日曜日なり。今日、上流に向かいし船。大船三、四十双。小船は四、五十双なり。老枝女、昨夜はみかん一個、八文と云い。本日は三厘と云う。彼等の中買する益甚だ多かるべし。

1月2日 午前五時廿分前解纜、夜航二時間斗り也。六時晨起。沐浴勤行（衣を略す）三々。大經より一切宛訓誡を始む。円海、みよ子、法雲、宮島先生、支那事非常に混雜せり。宮島氏の講述は詩文言語より歴史書目等至りて、懇切なりき。カキ飯、雜炊代用一个。八時、馬頭子。十時、南沱を過ぐ。宜教師、支那語（耶教大意）を土人に与う（一枚摺）、一時深溪を北岸に見。二時半、甌瓶磧なる島にかかり、三時、浅洲（岩礁）に乗上げ、船底を損し一時間漏水を修覆し、五時に島の端に達し、六時半、北岸に泊す。

1月3日 前五時半発。七時、新場を対岸に見る。八時、北岸に移る。昨夢、麦富、中河内、専老母、其他忘る。十一時半、灣州に着。十二時半発。これより、利正園の塩倉を見て、三時五十分、李渡に至る。大根を求む。六時十分、李渡より十清里ばかり上流に泊す（北岸）。

1月4日 午前七時十五分発、降雨遅々として進む。剪刀峡、江幅一丁にすぎず。十一時、寧石に至る。三目鏡の橋あり。十万を費すという。一時、南岸浅洲に乗上げ曳つな三、四百間、船回転す。幸いに四、五十分間にて発す。仙女砦の対岸の地なり。五時、石家沱に至る。この日、開市にて露店等多く洋鬼子、洋鬼子と叫ぶ。六時四十分、北岸泊。

1月5日 七時廿分発。朝、潮水の如き峽を過ぐ。風景好。この朝、対岸に渡り、砂原をすぐるに、



予等の船の先きに進みし船、閘礁に乗り上げ傾くを見る。通りすぐること一丁の頃、遂に航桂水に着くを見、救船多く、上下より至る。但し、砂岸に近し。十一時頃近く正北方に進む。薪舟を見る。十一時廿分、七層の塔の下、張桓侯の廟を見、其灘をすぐ。一時、長寿県に至る。対岸大砂原なり。水牛を見る。五時廿分、扇背沱をすぐ。六時四十分、北岸に泊す。

1月6日 六時四十分発、二小灘をすぎ、十時洛碛を過ぐ。老板女来る。明天到不倒を問う。没得風不到。悠好人、回家的下水、請坐船にて云うと答へり。大根の塩湯煎。たかなの塩煮。卵の塩焼。大根の油醬油漬に、我所持の味噌漬け。身体骨と皮に成り、夜は又極せまき所で両背を細めて寝為に、肋骨つきあい夜はいたみ、昼は平座して膝痛く、廿余日、二枚敷外に一步も出でず。重慶着后、果して異常なくば幸いなり。大に屈するは夫れ大に伸びるの為か……。山上過、畠あり。此の村大人の番共と同質なり。四時十分、本東司に至る。小峽を過ぎ南岩の端に泊す。

1月7日 六時十五分発。十一時、難灘にて流さること四、五丁。実に生きたるここちなし。一時十分、南に洛碛を見、これより峽を入れれば、三時十分、唐家沱にして、出船、入船千双、上下船を查する地なり。これより、右往左往進む。重慶の近きを思えば廿余日究屈の中にありて、日本人在留の地に着くことの嬉しく、満心、郷国帰るの喜心生ぜり。老板の「マーラコピー」、「ローパニヤン」、「チョンギロマー」水夫のヤーエー、フーラコクーロンロンなど。曳夫のエーエーエーも聞き納め来けり。昨夢、二条、今忘る。唐家沱等に住て大仏寺に日没し、夜八時半、重慶朝天門下に着泊す。夜景、神戸港の況、寒快なり。

1月8日 前九時、上陸。小梁子街、日本領事館に投ず。井、原、加、武、諸氏と面し、喜無限。朝は、領事館に食し、昼は堺、武田、氏の所に食し、夜は、井氏の客来に宴会に列す。夜十二時過ぎ迄語話して寝す。

1月9日 井氏の談話により、護照願書、又居住届を二通宛出し、森田氏と談。昼飯は領事の御馳走にあづかる。昨朝、岡本重昌の葉書、登より手紙、南条氏上海、重慶、二領事への照会状入の書留着す。夜は井戸川、原田、成田氏の宅に談話。それより堺氏室にて前途及この地、滞在の諸事を談す。食事の事、部屋の事、ボーイの事、其の他ことに御座候。

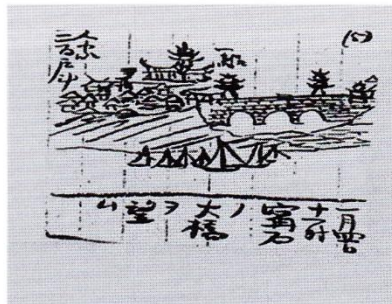
1月10日 午前、おそく房子を掃除致。午後、買物机を求めその他、器具類。晩、緒方、上海、二本手紙を書く。支那人教育を見たり。晩、成田氏来談。西藏、支那の将来及種々の事に関し、夜、二時迄談す。

1月11日 支那人、重慶、最富家の兄弟肅二人及老杉来訪。大に語話せり。晩、成田氏室に三時迄語話せり。蔵行、仏教等の事なり。手紙を三通したたむ。ねだい口子を求む・

1月12日 昨夜、三時伏し。今朝十時半、起来り。支那人、数名来る。老杉女等三人を叱す。学生来たり話す。国元、東肥へ書面出す。髪をつむ。

1月13日 午前六時起。原田君と楊先生に行き、語学を学ぶ。南条、本山、水野、上海別院、四本手紙を出す。仏像を安す。

1月14日 楊に行。又遊君来談。今日より会話を遊君に改め長く談話す。午後、領事の所に招戴を



馳走せらる。晩、武田氏の所に快談す。晩、勤行せり。今日、彭（ペン）という僕二十七才を雇う。一ヶ月二吊文。外に食料を要す。

1月15日 朝善哉を作り各人に供す。格氏へ名刺を送り本日は寿法主御命日に付勤行致し候。御差支無御座候はば。生来知ると成度候。と通し勤行す。加藤夫人より書、みかんを送られ、成田氏より恵心、書、筆入物送らる。成田、堺、原田、武田来る。加藤子二人。外に支那人参る。佐良にて勤行せり。茶菓を吃して寝る。后語話せり。この日精進。午後、晩、仏教上の語話を食事にて、武田、原田より□□の不必要論を聞き。心魂誠論を承りよわる。後我室へ堺氏来られ真宗大意を談せり。十一時宿。

1月16日 勤行し、朝二時間、游より会話を学ぶ。下午東陽門城外神仙洞の近辺に散歩。道士寺を見る。日記別にあり。夜、月謝談判三吊文と決す。肅兄より初七日、餐応に招かる。花巖寺に行く約束の為に行不能。残念、残念。

1月17日 蕭氏に招かれ花園に行（午後）。午前、報恩寺に行。茶菓を食し、又見物す。広大なり。

1月18日 十時十分、遊君及下人連れ発十一時。口に至り。（八里）。十二時、浮図関（城あり）に至り。一時半、石橋舗の駅に至り、中食す。好景好景。三時半、花巖寺に至る。念經を見る。午食。夜、語話す。

1月19日 滞在この日、成田、原田氏来れり。施食あり。乞食如き近人千余集まる。僧たたき箸をまき奇観なり。夜、大和尚及糾察両人の話、茶話会をなす。この日、花巖洞を見物す。納骨灰所睡仏。仙跡等あり。橋下の偈を写す。夜、十一時迄談話。今日室を変えたり。

1月20日 朝、再大和尚茶菓をよばれ、梵文彼り及シャム口語の經典を見る。十一時発籠に乗り、四時半帰宅。静、国元より手紙着す。この夜、語話。西藏僧を道に見る。

1月21日 午前語学。この時、貞宮殿下の死去の沙汰あり。領事に行き見舞す。

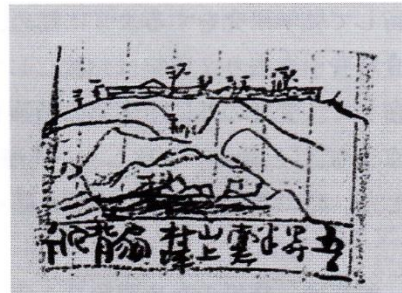
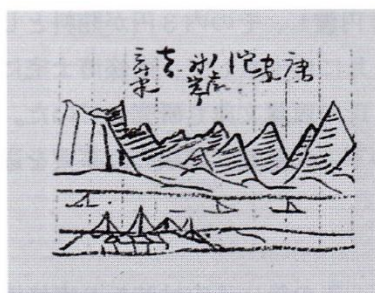
○甲斐寛中 △反省会 △仏教学会 △東洋哲学会 ○宮島先生 ○登 ○井上円了先生

○池武 △安藤君 ○白山君 ○南京 ○子安君 ○岡本君 ○杭州 ○石田氏

○最勝寺 ○蘇州

1月22日 羅漢寺見物。后、唐家花園行。帰途嘉陵江を下る。奇談、千厂門に着き帰る。同所には武田、堺、原田、予、遊、僕一名、六名なり。

1月23日 日記帳を新に作る故に、其の方に記す。



【解説】この「春秋日記」は、明治32年1月1日、鄧都県から同年1月23日、重慶滞在までの記述である。1月23日以降は、「飛越関碑記」に引き継いでいる。挿入スケッチは、「官話記一号」よりの抜粋である。

重慶に到着して、中国語の学習を游頭甫氏から習いはじめた。西藏行きを目指して情報の収集に当たりながらも、寺院を訪問して交流も図っていた様子が記されている。（文責・隅田正三）